初出主義の重要性

――加藤文庫の『羊の歌』講読会と「加藤周一おしゃべりの会」をつなぐ――

三浦　信孝

(1)「舞台または能と近代劇」の初出をめぐって

私が加藤周一の文章に初めて触れたのは、高校二年生だった1962年、国語の教科書に載っていた能の舞台に関する加藤の文章「舞台または能と近代劇」だった。

私が学んだ高校は、石川啄木が『一握の砂』で「教室の窓より遁(に)げてただ一人 かの城跡に寝に行きしかな」「不来方(こずかた)のお城の草に寝ころびて空に吸われし 十五の心」と詠んだ旧盛岡中学校である。その教科書には、啄木のエッセイ「食うべき詩」と、啄木より10年ほど後に同じ中学校に学んだ宮沢賢治が、1922年に最愛の妹トシの死に衝撃を受けて書いた絶唱「永訣の朝」(『春と修羅』)が載っており、私には遠い東京の知識人より同郷の啄木・賢治のほうが身近に感じられた。能の舞台など見たこともない地方の高校生に、加藤の論理的で美しい文章は、高級すぎてよく理解できるはずもなかった。

筑摩書房が1960年に出した国語教科書を私は後生大事にしまっていたが、半世紀ぶりに手に取って見たところ、加藤の文章に編集委員が付した解説に、「この文章は『知られざる日本』(社会思想研究会出版部)から採った」とあり、加藤の『知られざる日本』は『雑種文化――日本の小さな希望』(講談社)の翌1957年の刊行だから、私は「舞台または能と近代劇」は加藤がフランス留学から帰ってから書いた文章だと思い込んで

いた。

ところが、である。昨年12月に加藤文庫の『羊の歌』を読む講読会をリモート聴講したところ、「青春」の章を担当した福井優さんの報告資料に、加藤の「能と近代劇の可能性」が平凡社の加藤周一著作集第7巻所収で初出は1947年とあるのを発見し、私が高校の国語教科書で読んだ「舞台または能と近代劇」の初出が1947年の「能と近代劇の可能性」であることを知ったのである。加藤文庫の半田侑子さんを煩わせ著作集7の該当ページを送ってもらったところ、教科書に載っていた「舞台または能と近代劇」は1947年初出の「能と近代劇の可能性」の後半部分であることを確認した。

岩波の加藤自選集10巻末の著作目録によれば、加藤が1947年7月に日仏会館で開かれた現代フランス書籍展を見て書いた「サルトルと革命の文学」（これも週刊『文化タイムズ』初出の記事を半田さんに送っていただいた）と同じ8月に「能と近代劇の可能性」は発表されており、同じ年の11月にはヴァレリーやクローデル、ジッドやプルーストをまとめて論じた「象徴主義的風土」が発表されている。「舞台または能と近代劇」の結論部に、クローデルが『朝日の中の黒い鳥』（1927）に収めた「能」の冒頭の有名な一句「劇とは、何事かの起るものであり、能とは、何人かの来るものである」が引かれているのも、これで納得がいく。『羊の歌』の「青春」は「いくさ」のさなかに水道橋の能楽堂でみた能の舞台を美しい言葉で描いているが、その段落の最後に、「その後、私は、ほとんど世界中の劇場で、一流の芝居を見るようになったが、それは、私がまず梅若万三郎の謡うのを聞き、金剛巌の舞うのを見ていたからである。決してその逆ではない」とある。

「舞台または能と近代劇」は、加藤が「第二の出発」と呼んだ1951年秋からのフランス留学の後ではなく前に書いたものであることは重要なポイントで、加藤がヨーロッパを「見物」して帰ったあと「日本回帰」

したという皮相な見方をくつがえす証拠のひとつになるだろう。『知られざる日本』には、美しいものを語る批評的散文の極地といえる「日本の庭」も収められている。その初出は1950年であり、その追記には、「「日本の庭」を書いた後しばらくして、私は日本からはなれて暮すようになった」が、「青年のとき欧米の文物に心酔し、齢を重ねて後日本へ回帰するということが、私の場合にはなかった」とある。

その「日本の庭」を、「鷗外と洋学」、「ジャン・ポール・サルトル」、「演劇のルネサンス――ポール・クローデルを繞って」と同じ1950年の作として読めるのは、加藤の文章を初出主義に従って発表年順に収録した岩波の加藤自選集のメリットで、編集を担当した鷲巣さんの卓見のおかげである。

『羊の歌』講読会で初出にあたることの重要性を教えられたのは、私がオンサイトで参加した2022年2月の回でのことである。「小説の神様」横光利一が第一高等学校で講演したあとの座談会で、加藤が『旅愁』の作家を理詰めでとっちめる有名なエピソードを含む「縮図」の章の3回目だった。加藤は「横光さんは、《ヴァレリーもフランスでみそぎをしている》といわれましたね。あれはどういう意味ですか」と「別の男」がいったことにして尋ねている。しかし、報告を担当した西澤忠志さんの周到な調査にもかかわらず、横光がどこでそんなことを書いているのか分からなかった。ところが講読会にリモートで参加していた横光研究者の田口律男氏から、出典が筑摩書房版『ヴァレリイ全集』の内容見本に寄せた横光の推薦文にあるとの報告が引用付きのメールで寄せられたのである。横光の第一高等学校での講演は1938年に行われており、『ヴァレリィ全集』の内容見本は1941年11月のものだから、「縮図」で語られるエピソードは後付けによるフィクションであることになる。そもそも『羊の歌』は小説として書かれた作品だった。

(2)「加藤周一おしゃべりの会」の成り立ち

私が初出主義の重要性を教えられたのは、もう一つ岩津航著『レトリックの戦場――加藤周一とフランス文学』(丸善出版、2021)によってである。

岩津航は2016年の論文「加藤周一とヴァレリー――知性の仕事としての象徴主義」で注目し、2017年10月に日仏会館で開いた文化講座「仏文系作家たちによる戦後文学の出発」で「加藤周一と18世紀フランス的理性」について発表してもらった。講座では『1946・文学的考察』の加藤周一・中村真一郎・福永武彦に加え、加藤より1年早く1950年にフランスに留学しカトリック作家を研究した遠藤周作を取り上げている。

岩津の『レトリックの戦場』は、青年加藤が戦争中と戦後、フランス留学から帰り医者を捨てて文筆業に専念するまでに読んだフランス文学を逐一、忠実に読み直し、加藤がなぜこの作家のどこに注目したか、この作家から何を引き出したかを、フランスの時代状況と加藤が抱える問題関心に照らし、戦時下から留学までを段階を追って時系列的に明らかにしている。今は忘れられた作家かも知れないが、その時は加藤にとって重要な意味を持ち得た作家の核心部分を切り取る加藤の読む力を浮き彫りにするのである。研究書としては薄い本だが、各章がそれぞれ広範にして豊富な参照と的確な引用に基づく濃密な論理展開で、通読して初めて各章の関係が分かり、首尾一貫した問題設定による研究成果であることが分かる。

注目すべきことは二つあって、一つは従来ほとんど無視されてきた、フランス文学論と同時期に発表された加藤の創作『道化師の朝の歌』『ある晴れた日に』『運命』『人道の英雄』『神幸祭』に注目して、はじめ小説として書かれた『羊の歌』(1968)に流れ込む複数の源を明らかにしたことである。

もう一つは、加藤のフランス文学論は単行本も共著所収の論文も初出

主義を貫き、著作集に収められていない記事を初出の雑誌にあたって多数参照していることである。例えば第1章の注1に引かれた「アナトール・フランスとドレフュス事件」は、中島健蔵編『フランス文學読本』（東大出版部、1951）にあたっている。アナトール・フランスは一高時代の加藤が『青春ノート』で最もヴァレリー的な知性の作家としている芥川龍之介が愛読した作家で、加藤はアナトール・フランスから現代フランス文学を読み始めたのだった。私はアナトール・フランスが革命期の恐怖政治を題材にした『神々は渇く』について論文を書く必要から、古本で『フランス文學読本』を入手したところ、加藤は「アナトール・フランスとドレフュス事件」だけでなく、「フランソワ・ラブレーとユマニスム」「ラ・フォンテーヌとボワロー――古典主義の詩人」「ルソーとロマン主義的人間」「フローベール」「ロマン・ローランと《ユーロップ》」「アンドレ・マルローと三〇年代のニヒリズム」「ジャン・ポール・サルトルと実存主義」を執筆しているではないか。

しかしアナトール・フランスの記事には、『神々は渇く』のタイトルには言及があるが小説への評価はなく期待外れだった。私は「『神々は渇く』はドレフュス派作家の反革命小説か？」という論文を書こうとしていたので、この小説に対する加藤の評価を知りたかったからである（拙論は『作家たちのフランス革命』白水社、2022所収）。懐疑主義者のフランスはルソーを揶揄してヴォルテールを好んだが、私は加藤がルソーをどう評価しているかを知りたかったので、ルソーの章を読むと、参考文献として筑摩書房の『文学講座IV』（1951）に加藤が執筆した「浪漫主義の文学運動」を挙げている。これは片岡大右が「1950年前後の加藤周一――ロマン主義的風土の探究と日本的近代の展望（上）」（2015）で取り上げた文献である。片岡は加藤のフランス文学史観が「象徴主義的風土」から「ロマン主義的風土」に転回した、その鍵をルソーの再評価の中に見ており、渡辺一夫が翻訳したジャン・ゲーノの『フランスの青春』（みすず書

房、1951）の巻頭に「解説」として掲げた加藤のゲーノ論を重視している。（ジャン・ゲーノについては、岩津も本の第3章「抵抗の文学」でジャン＝リシャール・ブロックと並べて詳しく紹介している。）ジャン・ゲーノには戦後書いた大部のジャン＝ジャック・ルソー伝があり（翻訳は白水社のルソー全集別巻1）、私は読んでいないので宿題が増えた。

もう一つ1951年の『フランス文學読本』の特徴は、東大仏文科の講師だった中島健蔵が編者で、30歳そこそこの窪田啓作、加藤周一、矢内原伊作、中村真一郎の4人が分担執筆していることである。この顔ぶれを見て私は、マチネ・ポエティクの三人を一巻に収めた筑摩版現代日本文學体系82（1971）の月報に、矢内原伊作が寄せたエッセイ「春宵一刻」を思いだした。「いつも外国で暮らしている加藤周一がたまに日本に帰ってくると、この機会に一度皆で集まらないか、ということになる。〔……〕つい最近も、福永武彦、中村真一郎とぼくの三人が加藤の家に集まり、マダム加藤の手料理をご馳走になりながら歓談した。白井健三郎は風邪で来られなかった。窪田啓作はパリに去って久しい。」「食事をしながらの会話はとりとめないものでありながら同時に活潑だったが、話題を提供し会話をリードするのは加藤である。」

この「とりとめないものでありながら同時に活潑」で楽しそうなおしゃべりの会が、加藤文庫の『羊の歌』講読会を聴講するだけでは物足りない私が片岡大右に呼びかけ、片岡が半田侑子を発起人に加えて2021年9月に5、6人で始めたのが「加藤周一おしゃべりの会」である。もちろんコロナ禍の中で始めたのでリモート方式で、最初は片岡をはじめ発起人が交代で話題提供者になり、昨年1月に行ったのが岩津航『レトリックの戦場』の公開合評会だった。はじめはフランス研究者だけだったが、出発当初から会の一員だった伊達聖伸の東大駒場の東アジア藝文書院（EAA）と「おしゃべりの会／羊の談話室」の共催で、昨年4月には劉争の『「例外」の思想――戦後知識人・加藤周一の射程』（現代図書、2021）

の公開合評会を行うまでに発展した。もちろん仲間内での「おしゃべりの会」も、宗教学の伊達が私のアナトール・フランス論での問題提起を受けて1905年の政教分離法と日露戦争について、ヴァレリー研究の山田広昭が自著『三点確保――ロマン主義とナショナリズム』の要点と加藤とマルクス主義について、共和主義VS自由主義の視座からトクヴィルを研究してきた宮代康丈が加藤と社会主義のテーマで代わる代わる発表し活発に議論しており、加藤周一の専門家でない人たちを巻き込んでウィングを広げようとしている。そもそも専門を持たないことを専門にした百科全書的知識人に専門家だけの研究会は似合わない。加藤亡きいま、白沙会や凡人会のような加藤を囲む勉強会はもうできない。「おしゃべりの会」は加藤がどこかで言っていた「来るもの拒まず、去るもの追わず」のインフォーマルな会で、情報交換と相互啓発によって得られるものは大きい。

(3) 加藤周一は林達夫の「共産主義的人間」をいつ読んだか

昨年12月5日に東大駒場で東アジア藝文書院と立命館の加藤文庫の共催で「日本の知識人、その宗教と周辺――鶴見俊輔・加藤周一・林達夫」が開かれた。鷲巣力が「林達夫と聖フランチェスコ、加藤周一とカソリック」、伊達聖伸が「鶴見俊輔における宗教――はみだしの技法」のタイトルで発表する刺激的な会だったが、リモートで参加していた私はQ&Aで鷲巣に、加藤は林達夫の「共産主義的人間」をいつ読んだかという質問をした。「共産主義的人間」は『文藝春秋』1951年4月号に発表されており、スターリニズム批判の先駆とされる論文だから、戦争中に一通りマルクスやレーニンの『帝国主義論』まで読んでいた加藤が、1951年秋にフランスに出発する前にこの論文を読んでいたらどんな反応があっただろう、と思ったからである。

加藤は『日本文学史序説』下（1980）の「一九〇〇年の世代」で、「第一次世界大戦の後、〔……〕「大正デモクラシー」の時代に、二〇歳前後であったのは、一九〇〇年の世代である。この世代の知識人の特徴は、第一に、マルクス主義との対決――その受け入れと拒否、三〇年代後半からの転向など――であり、第二に、西洋文化への強い志向――いわゆる「大正教養主義」――である」とし、さらに「マルクス主義との対決を通らずに、知的な自己形成を行うことは、当時の青年の誰にとっても困難な状況が出現した」と書いている。加藤は特にフランス文学に学んだ作家・知識人として林達夫、石川淳、渡辺一夫、小林秀雄の4人をあげ、「軍国主義と太平洋戦争の時代に、〔……〕流れに抗して、大勢に順応することを拒否し、一貫して自己の立場に徹底した」それぞれの足取りを対比して描き分けている。しかし加藤はこの4人にいつどのようにして出会ったのか。

1940年、東大医学部に入学しながら「仏文研究室」に出入りして、「いちばん強い影響を受けたのは、戦争中の日本国に天から降ってきたような渡辺一夫助教授からであった」ことはよく知られている。その前にヴァレリーとの関係で小林秀雄の存在をかなり意識していたことは、『青春ノート』の1939年と40年の2本の小林論に明らかである。石川淳について加藤は、「私が石川淳から教わったのは、アナトール・フランスの『赤い百合』の情緒であろう」と書いているが、その翻訳は石川24歳の作だから驚く。加藤はおそらく戦後になって「普賢」以下の石川の小説に親しみ、1955年と59年に文人石川淳について見事な文章を書いている。では林達夫はどうか。

林と加藤をよく知る鷲巣力によれば、林と加藤が知り合ったのは戦後間もなく林が中央公論の出版局長をしていた頃のことで、林は加藤に書籍出版を提案し、それが『文学と現実』（1948）として結実する。その後、林は角川書店に移籍し、角川から出版されたのが『文学とは何か』（1950）

と『美しい日本』（1951）だという。

加藤が林についてまとまった文章を書いたのは、鷲巣が平凡社に入って最初の仕事だった林達夫著作集第1巻に寄せた解説「林達夫とその時代」（1971）だというが、そこには巻のタイトル「芸術へのチチェローネ」からして「共産主義的人間」への言及はない。1956年、ソ連共産党大会でのスターリン批判後ハンガリーで反ソ暴動が起こりソ連の戦車で鎮圧される。加藤はサルトルの「スターリンの亡霊」を受けて「サルトルと共産主義」（1957）を発表するが（翌年『現代ヨーロッパの精神』に収録）、そこには林の論文を読んだ形跡は認められないから、やはり加藤が林の論文を読んだのは林達夫著作集5「政治のフォークロア」（1971）でのことだろう。

先に引いた『日本文学史序説』下（1980）には、林の「共産主義的人間」に触れて「「冷戦」の時代に、盛んな反共宣伝のただ中で、反共的立場からでなく「スターリニズム」に激しい批判を加え得たおそらく最初の日本人が、林達夫であったのは、偶然ではない」というニュアンスに富む評価があり、林の訃報に接して書いた「林達夫を思う」（1984）には「林達夫の世界の両極には、シェイクスピアの科白の響きやイタリア文芸復興期の絵画の図像学があったと同時に共産主義やスターリニズムへの共感と批判――すなわち歴史と人民の問題への強い関心があった」とある。加藤自選集第7巻では長文の「サルトル私見」（初出は講談社の『人類の知的遺産77サルトル』1984）のすぐ後に「林達夫を思う」が続き、敬愛の情にみちた、弔辞のお手本のような「林達夫 追悼」も読める。

私は古本で買った中公文庫版『共産主義的人間』（1973）で初めてこの論文を読んだのだが、同書に収められた「『旅順陥落』―― わが読書の思い出」で、「日露戦争について書かれた夥しい文献の中、私がこれまでに最も示唆深く読んだのは、アナトール・フランスの『白き石の上にて』とそしてニコライ・レーニンの『旅順陥落』とであった」とあるのを読

み、我が意を得たりと思った。アナトール・フランスの『白き石の上にて』（1905）の重要性は『神々は渇く』についての拙論で指摘しておいたからである。また限られた情報を通して「fact finding（実情調査）」の努力に徹し、加藤が「マルクス主義的語彙によって武装された政治的宣伝さえも見破ることのできた」と評する林の「共産主義的人間」は、「「ソヴェート第一」が「ロシア第一」に、つまりソヴェート的現在より帝政ロシア的過去にまで遡って膨脹してきた」ソヴェート共産主義の「侵略的ナショナリズム」を暴いて、スターリンによる東欧の属国支配からプーチンのウクライナ侵攻までを構造的に予見しえた驚くべき内容だと思われた。

もう一つの発見は、林達夫と久野収の対談本『思想のドラマトゥルギー』（1974）で、マキャベリズムについての議論から、久野が「共産主義的人間」で林が立てた政治的人間の現実主義的「ボス型」と純粋な「聖者型」の二類型を、サルトルの戯曲『汚れた手』のエドレルとユゴーの対立になぞられたところ、林が「いや、大変教えられました。大した「読み」だ」と肯いていることである。林は「僕は別段サルトル・ファンじゃないけれども、サルトル理解には、彼の戯曲にしくものはないと、かねがね考えています」と言うだけあって、サルトルの戯曲をよく読んでいる。

サルトルの『汚れた手』が発表されパリで初演されたのは1948年のことで、反共劇と誤解して「右」が歓迎したためかサルトルは1950年以来その上演を禁止した。したがって1951年秋にフランスに出発した芝居好きの加藤周一は『汚れた手』の上演を見ていないはずである。下って1966年秋のサルトル来日のおり、劇団民藝がサルトルに『汚れた手』の上演許可を求める手紙を送り、許可を得て翌年秋に日本各地で上演している。学部生だった私は東京・砂防会館での上演を見て感激したので、古本で上演パンフレットを入手し、その間の経緯を知った。

もう一つ驚いたことに、丸山眞男は「「スターリン批判」における政治の論理」（1956）で、『汚れた手』からインテリ党員ユゴーとその妻ジェシカの会話から、ユゴーの「政治は科学だ」という台詞を引いて「政治過程を隅々まで科学や原則が支配するという想定と政治的信条との癒着」を説明している。丸山の最後の弟子世代に属すトクヴィリアン松本礼二は、丸山に林達夫について質問したところ、「林達夫の「共産主義的人間」にはやられました」と述懐したそうである。

もちろん加藤周一は1984年の講談社刊サルトル論で『汚れた手』について正確な分析をしているが、「おしゃべりの会」ではサルトリアンの澤田直と片岡大右の間で興味深いメールのやりとりがあったので、次回、数えてみると第17回の4月2日は澤田直を報告者に加藤の「サルトルと共産主義」をめぐり、『汚れた手』の解釈と合わせ議論する予定である。

ただその前の2月11日には、再び駒場の東アジア藝文書院との共催で、森山工著『「贈与論」の思想――マルセル・モースと〈混ざりあい〉の倫理』（インスクリプト、2022）の公開合評会を行う。加藤周一とは関係なさそうな企画だが、マルセル・モースはジャン・ジョレスに共鳴し、ロシア革命のボリシェヴィスムを批判して協同組合運動を実践した社会主義者でもあったので、ソ連が解体した1991年に、社会主義は死んだという大合唱を尻目に、資本主義社会がつづく限りマルクス主義は有効性を失わず、またマルクス主義に基づかない社会主義の未来がありうるとした加藤をモースと比較することは、遠くにあるものを近づける加藤の流儀に反しないだろう。当然のことながら私は『可能なるアナキズム――マルセル・モースと贈与のモラル』（インスクリプト、2020）のヴァレリアン山田広昭を、報告者のひとりに推薦した。

（みうら のぶたか　中央大学名誉教授、日仏会館顧問）